

「男」の生き方と環境問題 ——エコフェミニズムを手がかりに

大谷 通高（立命館大学生存学研究センター／地球研センター技術補佐員）

ポスターの構成は4つなのですが、今回は3と4を説明します。

まず、男の生き方と環境問題なのですが、エコフェミニストたちの指摘した「男性化」、という言葉、いわゆる「会社人間」化を男の生き方の例としてお話します。

会社人間というのは、日本の高度経済成長期を支えたサラリーマン男性の生き方と言えます。1991年に経済企画庁は会社人間を定義していきまして、それは、出世競争を自己実現とし、会社のために身を粉にして働く人間としています。こうした男の生き方が、日本の高度経済成長を発展させ、豊かさをもたらしました。しかし、その弊害として、公害問題があります。公害は、食べ物、水、空気といった、生を維持、ケアする根源的な領域の汚染を意味します。会社人間は、これを否認し、隠蔽したりしました。生命の維持よりも、企業の利潤や生産性の低下を重要問題として捉えてきた、ということがあります。会社人間の生き方はどういうものか、というと、会社のためなら非合法すれすれの行動をとるし、自分の所属する組織のみに目が向き、幅広く国際問題、社会問題に関心を払うことができない生き方として、経済企画庁は定義しています。それは、自然や生命、家族を省みず、企業や組織を優先して働く男の生き方であり、生命維持の根源的な視座が、極端に除外された生き方と言えます。こうした問題というのは、実は今でも続いていて、実際にSDGsにジェンダー平等が目標として掲げられていることもそれを示しているのではないかと思います。

では、男はどうするかというと、私が考えたのは、生への感度を高めるということです。言ってしまうと、男の「主夫化」でして、再生産労働を担う、ということなんですけれども、生に対するケア的行動、家事、育児、介護などの再生産労働の実践で、他の生命、身体の維持を意識して、食事を作るとか、生活環境を整えるとか整容する、などなどです。ただこれでも問題がありまして、「男はつらいよ」問題があります。一家の稼ぎ頭となるために出世競争や残業に追われ、その上で家事・育児を担うことが（全くの自業自得ですが）「男」においてプレッシャーになりかねません。つまり、「男」には大きな課題が残されている、ということです。

以上です。ありがとうございました。

